



墨田の町々

緑
墨田区立 寺島 図書館
あずま

昭和48.1.15

明治末の南割下水

墨田の地域に人が住むようになったのは、吾嬬神社から縄文土器が出土したといわれるように、かなり古い頃からであろう。しかしより確実になるのは、武蔵国から下総国へつながる官道が白鬚から水神あたりを通ると考えられる頃からであると思われる。伊勢物語や更級日記もこの道すじを通ったものと推測される。吾妻鏡にも「隅田の宿に参向す」とみえる。また鎌倉・室町時代にかけて墓碑である板碑が、東向島や堤通から幾つも発見されていることなども、そのことを裏づけていよう。応永5年（1398）の葛西氏寄進になる葛西御厨には、寺島、下木毛河、隅田、小村江などの地名がみえ、永禄2年（1559）の「小田原衆所領役帳」にも、葛西寺島、葛西小村井、葛西川、江戸牛島4ヶ村、葛西木毛川ともみえている。本所の地域は、明暦の大火（1658）後、江戸市街地拡張のため、本所築地奉行がおかれ堀割を通し開拓されたもので、武家地・寺院を中心にして地割りされ、あとは市街地の火除地の替地、代地として発展した。本所は江戸の内に入り、向島は江戸の町のうちに入らず、代官所支配となっていた。

本所の地域は、明治後は東京府のもとに東京何番とか、第6大区とかいろいろと変更するが町としては、明治5年に武家地をくり入れて編成され、その後昭和5年頃に再度変更され、今度の住居表示につながってくる。本所区は明治11年におかれる。向島の地域も本所と似ている。明治11年に南葛飾郡がおかれ、村の再編などあるが、大正に入って村から町へ吾嬬、寺島、隅田町と変り、昭和7年に向島区が設置される。そして昭和22年に本所、向島両区が統合して墨田区となった。

両国 両国という地名のいわれは、明暦の江戸大火災後の本所開拓にもなう両国橋の架設（1659）によるが、隅田川をはさんで、もと武蔵国、下総国とわかれていたことによっている。大火の犠牲者を葬り、回向院が建立されている。かつてはこの地域には、尾上町、藤代町、元町、松坂町、相生町、小泉町、亀沢町があり、なかでも元町は繁華街になっていた。この町には勝海舟が生れたり芥川竜之介が少年時代をすごしている。

千歳 千歳町は明治2年に誕生したものですでに町をなしていた隣接の相生、松井、松坂、緑などの諸町の名がすべて祝詞につながるところから、これにちなみ千歳と命名されたものである。このあたりはかつて本所開拓の時に架けられた一之橋（一ツ目の橋）から本所一ツ目と呼ばれていた。一ツ目には検校杉山和一の屋敷があり、現在、江島・杉山神社になっている。要津寺にも文化財が多い。



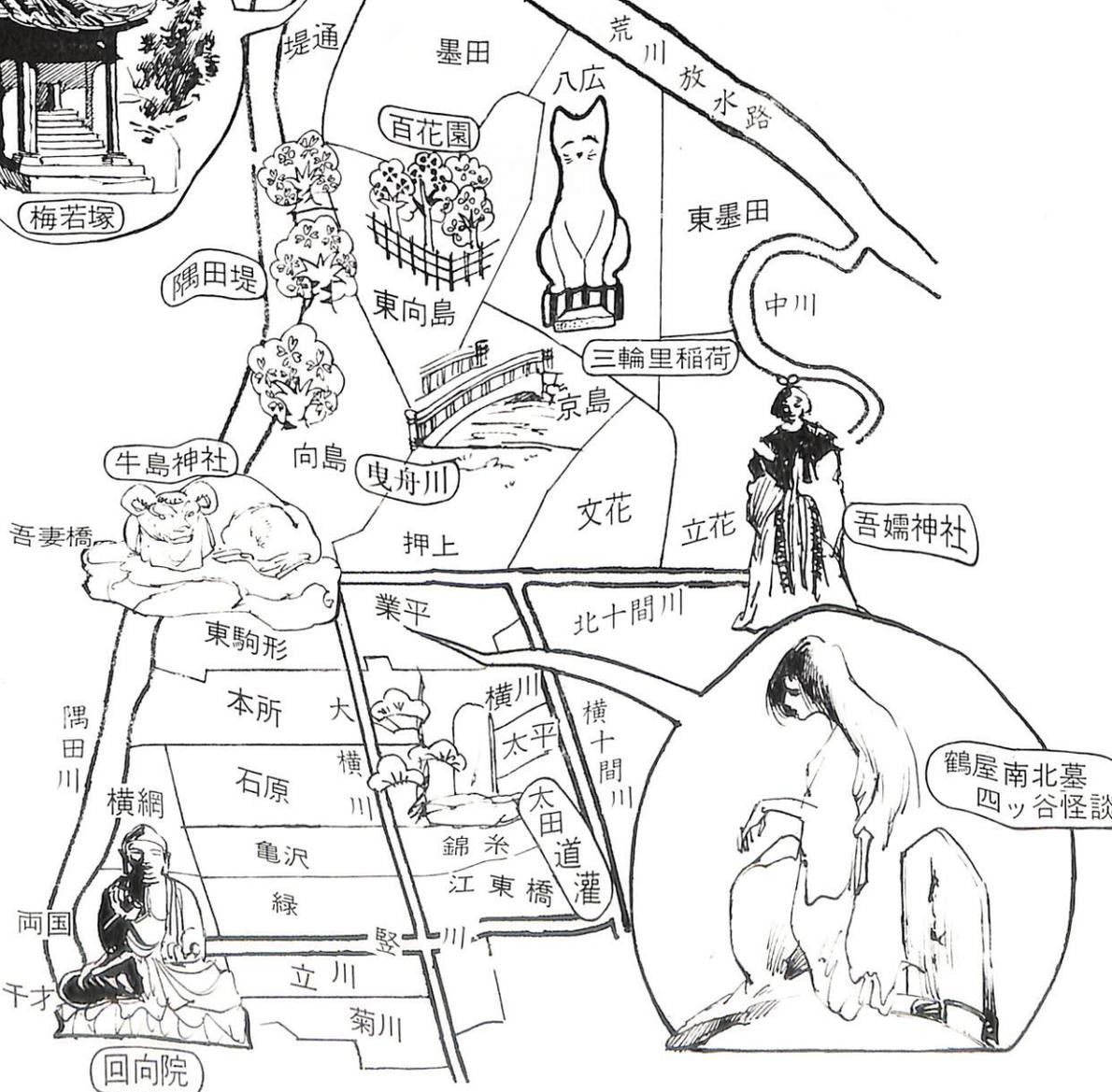
狸塚



榎本武揚



梅若塚



緑 本所開拓によって整地された地域であるが、緑町を名乗るのは元禄時代で、附近一帯の祝賀の町名と縁づけてつけられている。現在の地域には、かつての相生、亀沢町の一部、花町、入江町、永倉・長崎町の一部なども含まれている。緑町公園のあたりは江戸時代津軽藩の広い上屋敷であった。小林一茶が堅川沿いに住まっていたり、明治の文人芥藤緑雨が緑町から号をとっている。

立川 明暦の本所開拓によって低湿地に堀をつくるが、江戸城からみて縦になっていることから堅川が生まれ、横になっていることから横川が生まれた。その堅川を町名としている。江戸時代は林町、徳右衛門町が堅川に沿っており、明治5年に武家地を併合して現在の範囲になった。昭和42年の住居表示によって立川の字を用いるようになっていく。都史跡の杉山和一の墓のある弥勤寺がある。堅川沿いに自動車の部品屋が多い。

菊川 むかしこの地域に、菊川とよばれる小さな流れがあったことから町名となったものである。明暦の本所開拓後は、南横堀とよばれ、江戸城中の雑用をする中間・小人の拝領地になっていた。かれらの配置変えのあと改めて、先の菊川にちなんで元禄9年(1696)に町となったものである。明治7年開校の区内で一番古い中和小学校がある。また、わが国で初めて自転車を工業化した、宮田製作所も菊川にあった。

江東橋 錦糸町駅前一帯の地域で、昭和5年に新しく生まれたもので、京葉道路に架かる橋の名から起っている。江戸も末の嘉永の切絵図をみると、大名、旗本の下屋敷が並び堅川河岸や堀割沿いに町屋があるのみであった。その後、都心地域の替地、代地として本所柳原、本所茅場、本所松代町などができている。明治27年総武鉄道が開通し、始発点本所停車場とよばれていた。駅前では、伊藤左千夫が牧場を営んでいた。

横網 横網という名の起りは、はっきりしないが、隅田川沿いの町でもあるし、漁業との関係から起ったのではなかろうかといわれている。むかしの横網はもっと両国橋寄りの町屋であった。明治5年に、旧安田庭園に示されるような川沿いの大名下屋敷と、関東大震災で4万人もの横死者をだした被服しよう跡、すなわち現在の区役所、慰霊堂を含む地域であるが、幕府の本所御蔵、俗にいう、御竹蔵の範囲を編入したものである。

亀沢 大亀の住んでいた池があったということから亀沢の名が起ったといわれている。池は両国小学校のあたりにあったもので、現在の緑2丁目の交差点一帯を呼んだようである。今の亀沢は総武線の北側となり、だいぶ東北に町が移動したことになる。かつての南割下水の埋立てられた通りをまん中にしている。石原とならんでメリヤスの町でもあるが、鋼鉄関係の町ともいえる。幕末から明治にかけての戯作者河竹黙阿弥も住まっていた。

石原 石原の地名は古く、長禄年中江戸古絵図にも本所地域に、石原、牛島とみえる。その頃は現在の吾妻橋あたりから隅田川沿い一帯を呼んでいた。地名のいわれについては確としたものは伝わらないが、隅田河原の石がころがっていたことから自然と呼ばれるようになったものであろう。この石原には、奥医師から外国奉行にもなり、初代本所区議会議長として貢献した栗本鋤雲が住んでいた。メリヤスの町でもある。

本所 昭和41年の住居表示によって厩橋が本所と変わった。厩橋は、明治7年に架設された橋の厩橋からつけられたものである。本所についてははっきりしないが、荘園のような牛島ないしは石原郷の中心としての中ノ郷本所としてあったものであろう。それが向島、深川のように総称として用いられようになった。番場町(現本所1丁目の一部)にはシーボルトに学んだ伊東玄朴が開業していた。北割下水が厩橋を渡る春日通りである。

東駒形 古くは中ノ郷原庭をはじめ、番場町、表町、薬師河岸、北新町、荒井町、中ノ郷竹町、小梅業平町、西横川河岸、中ノ郷横川町など数町に分かれていたが、昭和5年8月の区画整理実施で合併され、新しく命名された町名である。これは、浅草駒形に対する駒形橋東もとの地ということから町名としたものである。浅草駒形の由来は、馬頭観世音を祭った駒形堂があったからといわれ、馬を駒ときどったものではなかろうか。

吾妻橋 吾妻橋の名の起りは、大正の大震災後の区画整理のあと昭和5年で、橋の吾妻橋から出ている。江戸末期の切絵図をみると大名屋敷と寺院が多く、そのすき間に町屋があった。町名にも用いられた吾妻橋は、安永3年(1774)民間の手によって架けられた橋で幕府は大川橋の名を与えたが、町人たちは勝手に東(あずま)橋と呼び明治になって正式に吾妻橋とされた。隅田川の河岸には青物市場、源森川沿いには瓦焼きがあった。

錦糸 現在の錦糸町駅の北側線路沿いに大横川から横十間川につながる細長い堀があって岸堀と呼ばれていた。それがいつのまにか錦糸堀と一般に呼ばれる様になった。岸堀がなまって錦糸堀になったとか、琴糸をこの辺で作っていたからともいわれているがはっきりしない。この地の発展の糸口は明治27年総武鉄道が本所一市川佐倉間の鉄道を開設したことである。錦糸公園のところはかつて陸軍の食糧しようであった。

太平 太平(町)は明治2年に新しい町名として生れたもので、同時に命名された千歳町と同じ様に祝賀の意味から「太平」と付けられたものであろう。なかには太平町にある法恩寺が太田道灌とゆかりがあり、山号を平河山というところからそれぞれ「太」と「平」をとって命名したのだともいっているがこれはこじつけにすぎないだろう。明治には現在の地域に、先の太平町、花月町、柳島横川町、柳島春秋町、本所柳島町、柳島梅森町などの町名がみえた。

横川 横川の地名は横川（大横川）からきているもので明暦の本所開拓による江戸城から見ての堅川に対する横川に由来する。この地域は昭和6年の区画整理の時、太平町、中之郷業平町、押上町、柳島梅森町、柳島元町、柳島横川町のそれぞれ全部ないし一部を含めて横川橋と町名が変更された。そして、新住居表示で横川となった。横川1丁目のタバコの専売公社業平工場は震災後浅草区南元町から移転し昭和7年5月から操業している。

業平 業平の地名の由来は、現在吾妻橋3丁目の南蔵院にあった業平塚から来ているようで、伊勢物語にみられる隅田川と在原業平の関係によって後世に水塚がそう呼ばれたのではなかろうか。明治24年に中之郷業平町が新設され昭和5・6年の区画整理で中之郷業平町、押上町、柳島元町が業平橋と平川橋になった。新住居表示ではこのふたつが合併した。春慶寺には、四ツ谷怪談で知られる鶴屋南北の墓がある。

向島 向島という名称は、昭和7年向島区の出現によって行政的にも位置づけられたが、一般的な俗称としては江戸時代の初めから用いられていたようである。隅田川をはさんで浅草側から寺島、牛島（小梅、須崎、押上、仲ノ郷）等をさして、ばく然と川向うの島という意味で向島とよぶようになったようである。この地域には、名所旧跡並びに文化遺産が多い。江戸時代末の文化文政の頃から文人墨客に好まれ、文化人の居住者も多かった。

東向島 向島の地域のうち、東の部分という意味で向島の東隣りという意味ではない。旧寺島町の部分がほぼ東向島にあたる。寺島については、応永5年（1393）の「葛西御厨注文」38郷の内や永禄2年（1599）の「小田原衆所領役帳」のうちに葛西領寺島の名がみえる。貫高も高く、区内でも草分け的な発展のあとを示している。寺島の発端となったといわれる。蓮花寺や法泉寺があり、また名勝百花園などもある。

堤通 堤通は隅田川と、かつて桜並木の墨田堤であった土手に狭まれた、いわゆる堤外の地域である。南は皮革産業の草分けの一人である西村勝三の銅像のあった銅像堀から、北は鐘ヶ淵紡績のあった綾瀬川までの細長い町になっている。かつては、寺島の渡し、白鬚の渡し、水神の渡しなどがあり伊勢物語の古道にもつながっていた。隅田川神社、梅若伝説で知られる木母寺がある。現在防災拠点の東白鬚地区になっている。

墨田 地名により川名が生れたと思われるが、洲田から須田、隅田などを変遷していったのではなかろうか。隅田の隅は当用漢字になく区名と同じ墨田となった。現在の墨田は堤通の東にあるが、かつては隅田川に面していた。吾妻鏡にも義経が頼朝を隅田の宿で対面するところが記述されている。若宮、善左衛門、三木、隅田村が合併して隅田村になり、大正12年町となった。七福神の毘沙門天を祭る多聞寺がある。

押上 押上という地名は、土のたい積状況をあらわしているといわれ、陸地化していく様子を示している。区内には押上と同じような起源をもつ地名に、牛島、須（州）崎、寺島、請（浮）地、小村井（小村江）など、多くみられる。押上の地名が文書にあらわれるのは、江戸時代の「小田原衆所領役帳」に見られる牛島四ヶ村のうちの一つにあらわれている。その範囲は、かなり広いものであった。

京島 京島は昭和40年7月から、新たに命名された町名で、新生の町として更に発展を期して大きい・さかんの語意をもつ「京」と旧向島区の「島」を採り「京島」と名付けられた。ここは江戸時代の寺島村・須崎村・請地村・小村井村の一部分にあたり新住居表示以前には寺島町4丁目、吾婦町西1丁目、4丁目などであった。現在この地域は日本一の人口密集地区となっており、橘銀座通りを中心として下町の活気あるにぎわいをみせている。東向島との境の曳舟通りが、かつての曳舟川であった。

文花 この地域の中心に小中学校、保育園、青年園、図書館など、文教施設が集中しているところから「文」の字を冠し、旧町名由来の吾婦神社の主祭神である弟橘姫の立花から「花」をとり、合わせて文化の花開くとの意も含んで「文花」と名付けられた。現在の文花1丁目のほとんどが以前東京モスリン会社のあった地域である。古くは小村井村の一部で、東武亀戸線の駅名にその名を残している。中居堀が香取神社の側を通り、北十間川に注ぐ。

八広 この地域は、吾婦町、寺島に隅田町の一部を含み、旧丁（吾婦町西5・6・7・8・9、寺島6・8隅田4丁目）の数および旧字（あざ）の数がそれぞれ八ツあり、八の字は末広がりともいわれ縁起の良いところから新生の町として、将来末広がり、大きく栄えるとの意が、字画も簡明である「八広」と名付けられた。ここには、こんにゃく稲荷がある。御礼がこんにゃくで、無病息災の御利益があるという。

立花 旧町名吾婦町の由来である吾婦神社の主祭神弟橘媛の「橘」を取り、読み易く書き易い「立花」と名付けられた。「吾婦」の地名は日本武尊が東征の帰途碓日嶺から東南をみて、「あづまはや」と嘆いたという説話から起ったという。明治22年、上木下川、下木下川、大畑、葛西川、小村井、請地村が合併して吾婦村が生まれ、昭和41年5月の新住居表示以前は吾婦町東1・2・3・4・5・6丁目の各一部分であった。

東墨田 ここはかつて吾婦町東7丁目、6・8丁目の各一部にあたり、昭和41年の新住居表示実施にさいし、地形上墨田区的最東部に位置するところから「東墨田」と名付けられた。ふるくは下木下川とよばれたが、木下川（木根川・木毛川）という地名は川名から起ったものであろうが、現在の綾瀬川堀・中川などが考えられる。荒川放水路の開さくによって、上木毛川は葛飾区に属している。